



ドバイ・メトロ (解説p.39)

ドバイの鉄道整備と経済戦略

(写真 石原久嗣 2009年9月10日撮影)

アラブ首長国連邦のドバイに、中東初の無人運転の鉄道が開通した。写真は2009年9月9日に開通したばかりのドバイ・メトロと、リゾート開発の拠点となっているドバイ・マリーナ地区に立地するリゾートホテルやマンションなどの高層ビル群である。ドバイ・メトロは、近年の急激な人口増加を背景に、先進国の大都市並みに発達したモータリゼーションによる深刻な交通渋滞を改善するための手段のひとつとして、2005年より整備が進められていた。建設工事と車両の製造は日本企業によるものだ。今回開通したレッド線は全長52.1kmで、ドバイ国際空港から旧・新の市街地とドバイ・マリーナ地区を経由して、南西郊のジュベル・アリ地区までを結んでいる。これとは別にグリーン線（全長22.5km）の建設が進められているほか、さらに

2路線と路面電車2路線も構想中である。ドバイ・メトロの車両はコンピュータ制御の無人運転で、5両編成のうち1両は革シートのゴールド・クラスと女性・子ども優先座席に当てられる。またイスラームの安息日となる金曜日は、午後2時からの運行となる。

これまで日本に伝えられてきたドバイ情報は、世界の富裕層を対象としたリゾート開発が中心であった。しかし、2008年秋に発生した世界金融危機の影響で、ドバイでは現在こうした大規模な不動産開発は凍結されている。そもそもドバイの経済発展は、アジア、アフリカ、ヨーロッパの中央に位置する地理的な優位性を活かした中継貿易によるものであり、その歴史は19世紀中頃まで遡ることができる。ジュベル・アリ地区には世界最大の人工港であるジュベル・アリ港とそれに隣接した経済特区ジュベル・アリ・フリーゾーンが整備されている。そこには約6000の企業が立地し、近年は物流だけでなく製造拠点としても発展しつつある。

(鳥取大学地域学部准教授 山下博樹)